

# 筆子塚に見る師弟関係

群馬県の筆子塚を事例として

柳井久雄

*Fudekozuka as a Reflection of Teacher-student Relationships as Seen in Observations of Fudekozuka in Gunma Prefecture*

はじめに

① 筆子塚(筆塚)の初出について

② 筆子塚の実態

③ 勢多郡内の筆子塚

結び

## 【論文要旨】

本稿は、群馬県内に建立されている筆子塚(筆塚)から見た師弟関係を考察するものである。

筆子塚は、近世の庶民教育機関であった手習所(寺子屋)の筆子(弟子)たちが、手習師匠から受けた恩を後世まで伝えようと建立した墓や顕彰碑である。一般に、台石の正面に「筆子中」「門人中」「筆弟中」などとあり、まわりに筆子(弟子)たちの名前が刻まれている。師匠の辞世の句が記されたものもある。

これらの筆子塚(筆塚)の実態に即して、手習所(寺子屋)の師弟関係の深さ・温かさを探ろうとしたものである。

群馬県内で確認された六二三基の筆子塚(筆塚)の態様を見ると、手習所(寺子屋)の師匠は、筆子(弟子)たちから深く尊敬され、いつまでも慕われていたことがうかがえるのである。

富士見村大聖寺の筆子塚の台石には、「手習弟子六十六人立之」と刻まれている。前橋市の井上正香の弟子(筆子)たちは、師匠の妻の墓まで建立している。その台石には、「井上正香之門人等立之」とある。ある筆子塚には、毎年師匠の命日に、かつての筆子が、師匠の好物であった豆腐を供えに来ていたと聞いた。

筆子塚(筆塚)は、わが国の教育遺産である。今日、教育の荒廃が叫ばれているが、師弟関係の深さ・温かさを象徴している筆子塚(筆塚)に学ぶべきものがないだろうか。

このように本稿は、群馬県内で確認された筆子塚(筆塚)の個別の実態から、手習所(寺子屋)の師弟関係を考察したものである。

手習い(識字)は、わが国の庶民が、自由になり幸せになってきた歴史の根源だと思ふ。その手習所(寺子屋)教育の再認識を願って執筆したものである。